

白金葎

1月号



平成31年1月発行

第94号

定例会（毎月第三金曜日 アビスタ会議室）

二月十五日（金）第五正午～三時…吹越、野焼

三月十五日（金）第五午～三時…春の月、蜷

四月十九日（金）第三午～三時…遍路、桃の花

兼題参考句二月十五日分（吹越、野焼）

野が焼けはじめ白鷺驚きたり

山口誓子

真黒に土堤を焼かれて水湛ふ

〃

吹越に大きな耳の兎かな

加藤秋邨

吹越やきらりきらりと日の面

〃

一月例会句会報（19／1／18 新年一般

10名欠）

光成高志

ウィーン・フィルニューイヤーコンサート

元日は維納管弦楽団 新年 演奏会

初写真撮つて吾とは思はれぬ

十五枚の將軍かなし初詣

初笑とて空笑ひ思ひつ切り

初春狂言子役の声のよく透る

佐藤宏之助

キャンパスの守衛と御慶交しけり

平成の御代を存へ屠蘇を酌む

杜はまだ神代の暗さ寒稽古

どんど火に蹴り込む去年の福達磨

屠蘇を酌む鼯の罌を掛けて来て

増田陽一

梟の飛跡を読むと森の蔭

手に載せる砂漠の石や日脚伸ぶ

暫くは死なぬと決めて年の酒

靴下の穴を見てある初雀

蟬聞きたしと言へど霜夜の更けるばかり

光 みち

蹤いてゆく鎌倉古道初詣

縫初や牛蒡の灰汁のつきし指

初日さす橘の葉のあをあと

盛装の男子の埴輪お正月

大詰は播磨の晴れて初芝居

松村幸一

青空や福袋乗せベビーカー
竹ぼうき人目避けあり七日かな

年惜しむ名画のユダに惹かれつつ

武者昭七

松過ぎのちよつと無頼の立ち飲みを

冬ざれや雁木の隅の影二つ

徴兵のありし世知らず成人祭

雪除けて一人通れるだけの道

下戸なしのお顔出揃ふ宝船

思ひ出は鯖の味噌煮と無縁坂

いちまいの海生みきりし初日かな

風花を背なに受けつつ街を行く

仲本興正

落椿うず高く積む庭の隅

鳶舞へるみさき七福詣かな

磯目健二

綾取りの橋よりバンジージャンプかな

送電塔連なる沼や初日の出

新雪は垣根の丈をふやしをり

風ぎわたる沼の広さや初茜

マツチ火のごとき冬芽や詩の生まる

鍋の湯気炬燵に昇る薬喰

日向ぼこ昔こころは映画館

何時の間に金婚過ぎて年新た

田宮敦子

初日さす庭に蠟梅ほころびぬ

電線に音符のごとく寒雀

吉羽多美子

宅配便や正月飾りドアノブに

身ほとりに寄りくる柚の冬至風呂

社員総出仕事の前に初詣

初場所や背中に砂の勝力士

どこまでも我につきくる落葉かな

新しき廻しに砂や初相撲

朝夕の佛の水も春の水

飯田孝三

万歳や門毎昭和われ一桁

一茶句碑の石に来てをり初雀

偕老の軒ちぐはぐ摸枕

寸酌にすぐ酔まはる鏡餅

幼ナの福笑ひピカソが目を剥ける

一句鑑賞

光成高志

キャンパスの守衛と御慶交しけり

宏之助

だれでも入って行ける大学の門を入りその守衛さんに「明けておめでとうございまーす」とことわりも含めて挨拶する。すると即座に守衛さんから御慶が返ってくる。じんわりと淑気がただよい句気も生まれてくるような佳句です。国立くにたちの一橋大学の雰囲気をつぶやいたらそこで作句されたとか、それに一驚しました。

一茶句碑の石に来てをり初雀

孝三

一茶には小動物に注ぐ慈悲の句が多いですが、きつと

「我と来て遊べや親のない雀」の句ではないでしょうか。

この句碑の石に元日と言っても元朝のめでたい気分の時雀が来ているのを認めて、おお来ているな、と初雀に思いやった作者です。以下は蛇足ですが、時には母のない子のように」という歌の思い出を書いておきます。子守歌として歌いながら子を寝かせていましたら、なぜか涙が出て来て泣いた思い出です。こんな歌の作詞は誰がしたのだろうかと思つて何年か経つて、寺山修司を知りました。この人は違つ！と期待していましたが、又しばらくして死なれてしまいました。

盛装の男子の埴輪お正月

みち

正月の上野の国立博物館にて見た埴輪をそのまま書いた句です。その埴輪をお正月という女性らしい季語でいい止めたのです。盛装の女子や妊婦の埴輪もあつたのに、男子の埴輪を詠ったのがみちさんらしい。どんな盛装？とお思ひの方はITで見られます。

いちまいの海生みきりし初日かな

幸一

大吠埼のような岬で海から上つて来た初日を見ての句でしょう。水平線から出た初日が赫奕かくやくとして海を上つて来て海面に広い大きな日矢が出来、岸まで届いた時の感動が基になっています。それを初日が海を生み切つ

たと解釈し表現されたのです。客観描写ではなく、自然を解釈したり擬人化することは相手が偉大過ぎて万人の共感を得るのは至難ですけれども、ここでは成功していると思います。初日をこのように断定された気合いが伝わってくるからです。「初日は昇り海は寄りくる昔たからか」(中村草田男)「初日浮くや金波銀波の太平洋」(正岡子規)「差し出でて崎々迎ふ初日の出」(山口誓子)くらいが大家の客観描写の初日の句ですが、幸一さんの解釈の強さが時空とも広漠たるものですから、これらの句に負けていないと思います。

鳶舞へるみさき七福詣かな

興正

鳶の舞う岬から岬へ七福神詣に巡っているのどかな気分が感じられます。どこの七福神かと思ひ巡らすまでもなく、これは南関東の三浦半島とか鎌倉とか温泉巡りを添えれば南伊豆のそれではないでしょうか。鳶舞える岬が正月気分を出しています。元日から七日の間にお参りするのならわしなので結構忙しいです。

一句鑑賞

磯目健二初

春狂言子役の声のよく透る

高志

初春狂言は大歌舞伎の正月興行。子役を務めるのは小

学生年齢の男児である。厳しい発声法の鍛錬もあるが、肉体的に変声期前なので成人の一オクターブほど高い音程で、舞台から最奥の向かい桟敷まで、その口跡は透明によく響く。歌舞伎では姿・形より口跡の良さが最も重んじられるが、子役の台詞回しは芝居に可憐・哀調の独特な演劇効果を生む。正月らしい歌舞伎座の風景が伝わってくる佳句である。

身ほとりに寄りくる柚の冬至風呂

多美子

冬至湯に浸かっていると湯船に浮かんだ柚子の実が身体に自然にすり寄ってくるのは、多くが思い当たるところ。上五の「身ほとりに」は、いかにも実感に即しながら風雅な表現である。中七は「寄りくる柚や」と切り字にするのもあるかも。

一茶句碑の石に来てをり初雀

孝三

靴下の穴を見てゐる初雀

陽一

初雀の二句。常に小動物を愛した一茶。その一茶の句碑なればこそ、元日には、まるでお詣りするかのようにな雀が寄つて来るというのが前者。人の身近に生きる雀と一茶は、至妙の取り合わせである。元日、することもなく足を投げ出して昼寝しているホームレスの男の靴下には穴があいている。雀が傍に寄ってきて、それを珍しそうに見上げていると

というのが後者である。今時ボロ靴下を履いている人間の哀れな姿と雀の可憐な仕草の対比が面白い。一茶句碑は我孫子市役所構内や柏あけぼの山公園など房総にも数多くある。

マッチ火のごとき冬芽や詩の生まる

興正

寒風に揺れる木々の枝の冬芽は、極小のシンボルともいふべきマッチ棒の先端のように小さく目立たないものだが、紛れもなく遠からず来る春の華麗な爆発的変貌の出発点となるものであり、自然現象の小さな胎動に季節の詩情の始原を作者は予見している。

借老の軒ちぐはぐ寝枕

孝三

同じ閨房でも老夫婦の艶めかしさの全く無い寢室風景互いに無粋な軒までかいて眠っているのだ。その軒の音が違うように、それぞれが見ている夢もきつと異なるに違いない。一見突き放した詠みぶりだが、ユーモラスな老夫婦の同衾に注ぐ、作者の温かい視線が感じられる。作者自身が、自分たちの元日の同床異夢を苦笑しつつ自虐的に韜晦して、表現したものとも見るのも深読み過ぎるが可能であろう。寝枕とは、寝の絵を敷いて良い初夢を見ようという、昔からある縁起かつぎである。

日向ぼこ昔こらは映画館

興正

映画が一般大衆の最大の娯楽だった頃は、映画館のあ

る繁華街には織るように人々が行き交っていた。やがてテレビ・ビデオに押されて映画館は廃館、物流も人の流れも変化して郊外大型店の影響で雑居ビルは空きスペース化し、商店はシャッターを下ろして、人影まばらな廃市へ一変した。時代の急激な変化に取り残された斜陽の街の軒先に座って、漫然と閑散とした往還を眺めている老人たち。そこは今は廃墟だが、一時代前は映画館で人で賑わっていたのだ。うら寂れた街の哀愁。

徴兵のありし世知らず成人祭

幸一

出席する新成人は、平成も十年を経て生まれた若者たちであろう。青年が徴兵検査のあと戦争に狩り出されて行った時代は、彼等にとつて遠い遠い大昔の話である。戦前、成人になることは人生の運命を左右する肅然たる一里塚を意味した。今は晴れ着で祝う通過儀礼の行事に過ぎない。平和の世は貴く幸せだと思いつつも、平和ボケした現代の世相に、複雑な感慨を抱く戦前派の後ろ姿が見える。

一句鑑賞

増田陽一

屠蘇を酌む鼯の尻を掛けて来て

宏之助

何と野性味ある活動的な人なんだろうかと羨ましくな

る。元旦早々、恐らく深夜から未明まで藪を潜つて鼬鼠を仕掛けてきたのだから手馴れた様子と言ひ、プロの鼬鼠師に違ひない。このような生活もあるのだと、その土地柄が想像される。ミンクが輸入される以前、鼬皮は高価に売れたそうだ。捕れるとすぐに皮を剥ぎ、板に張りつけて出荷したという。この殺生行為と新年を寿ぐ平和な祝い事との並列が何とも言えない強い印象を作っている。「季重なり」かとの見方もあろうけれど、これだけかけ離れていれば効果がある。約束事だけを優先にしては、詩としての俳句が衰弱するのである。

いちまいの海生みきりし初日かな

幸一

初日に照らされて暗かつた視界の中に海が「一枚」誕生した、と言う、感傷も伝統的な情緒もなく、視覚の印象が強い表現である。しかも「いちまいの」「生みきりし」などの用語に深い配慮を伴いながら新鮮である。まるで優れた映画の一場面を見るようではないか。

初写真撮つて吾とは思はれぬ

高志

「初」写真だから、恐らく晴着を着て、父祖伝来の紋付袴かフロックコートかで記念写真を撮ってもらつた。「吾とは思はれぬ」には二様の鑑賞が可能であるけれど、ここは、映された自分の姿が父祖の面影を引いて「吾と

は思われぬ」ほど歴史的人物の如く写つていたという。

「初写真」という古風な季語がそんなイメージを誘う。

風ぎわたる沼の広さや初菰

健二

初日の出る前、実際に沼に行つて見たらしい実感が句にある、四十年ほど前には僕も初日を見ようと車窓の霜を掻き落して出かけたものだった。あの頃は鴨の大群で沼が埋まつていた。掲句では「風ぎわたる」の措辞で沼の広さが見えるようだ。あの鴨の群は何処に行つたのだろう、と少し淋しい。

一茶句碑の石に来てをり初雀

孝三

雀と一茶とは親和力があり、初雀を配するのに「一茶の句碑は良く合うけれど、もし句が「吾と来て」や「すずめの子」では付きすぎるであらう。この「石に来てをり」に具体性があつてそれが省かれ、雀の動きが可愛く見える。因みに「一茶ゆかりの「あけぼの山」にある石碑には「米撒くも罪ぞよ鶏が蹴合うぞよ」の句がある。

十二月号読後感

磯目健二

十二月号拝受。じつに読み甲斐のある二十頁であつた。十月に急逝された平野ひろし氏の追悼記を主宰が草して載せているが、そのユニークな視点にすこぶる意表を突かれた。「平野先生の句」と題して最後の句集「塩見」を

主に取り上げ、故人が自動車で廻った吟行地と作句を点検し、各地の無名の文化財を発掘顕彰することを素志として遂行された執念の巡歴の所産であったことを明らかにする。さらに平野氏の年々の吟行の行程距離を割り出して、それがいかに遠大なものであったかを実証してみせる。年毎の吟行地をこの句集から綿密に採録し、本拠地富士市からそこへ至る往復走行距離をグーグルマップで推定し集計、グラフ化までするという科学的な方法を駆使して、平野氏の毎年の吟行距離が芭蕉の「奥の細道」と同距離であり、九年間の走行距離がじつに二万二千キロに及ぶことを示す。この現代希有の俳句荒行というべき

平野氏の吟行を数値的に裏付けて、その偉業を讃える。それは、故人への熱い思いのあらわれだが、いかにも多年にわたって専門の科学者でもあった主宰の面目が躍如としている。句集の書名をすべて愛する山の名にするほど平野氏はこよなくアルペンを愛し、また足まめな旅の俳人として多彩な足跡を各地に残した。その俳業を独特の観点から浮き彫りにするこの追悼文に、故人もさぞや莞爾とするに違いない。さらに誓子俳句との対比から平野俳句の特長を論じ、句作において誓子に影響励起された面も仔細に論じ、師に学びつつ詩境を高めていった道程を

も視野に収め、それに重ねて自らの俳句観も率直に披瀝する、情実溢れる追悼記である。

大沢真幸著「三島由紀夫ふたつの謎」に触発されて、「豊饒の海」の破壊的結末と割腹自裁の関連をさまざまに論じる俳窓評論集の文章も、数学の集合論まで引用駆使する型破りの評論で、難解だがいかにも主宰らしい卓見に満ちている。その読後感に言及する枚数が、もはや残っていないのが残念である。

芭蕉のかるみ以後 (48)

光成高志

「冬の日」を読んで蕉風確立の足跡を見て行く。先に発句と脇を鑑賞した。

笠は長途の雨にほころび、
帯衣おびえはとまりくのあらしにも
めたり。侘わつくしたるわび人、
我さへあはれにおぼえける。
昔狂哥の才士、此國にたどりし事を、
不圖おもひ出て申侍る。

狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉

芭蕉

笠は長途の雨にほころび、
紙の衣は泊り泊りの風に揉まれち
やつてぼろぼろになった。
侘わびを尽くしたわび人の我さへ
われに思われる。昔竹齋という
狂歌好きの藪医者やぶいしやが名古屋に
来た時つづれ紙子に紙頭巾、
取りさがしたる姿にて、
さながら鶯が身震いして風に吹かれし
とき様子を不図思い出して

申し上げます。谷木因の桜下文集に「歌物狂二人木がらし姿かな」（木因）があり、又風雪に「木がらしの吹くくうしろ姿哉」があつてこの時の芭蕉が詠まれている。木因の狂句と竹齋の狂歌を重ねて名古屋の連衆に披露しているのだ。俳諧の笑いと滑稽を打ち出しおのれ自身を別の自分が見つめている、即ち自らを戯曲化することによつてはじめて見えてくる風狂の心境を示したのである。

たそやとほしるかさの山茶花

野水

挨拶の発句にたいする答れの脇で、客の風雅をほめる意味をもつて仕立てた句。たそやというのは誰ぞやという意味で、山茶花の散りかかる風流な笠を着て居られるのはどなたでしょうかの意。発句の竹齋に似ている人ですが、こちらから見たら誰でしょうかとたずねる形にしたのだ。

有明の主水に酒屋つくらせて

荷兮

山茶花の散りかかる笠の主は誰ぞやと聞かれたのでそれは主水に居酒屋をつくらせてしまつて、まあ、風狂なこと、という思ひよせたのである。主水は禁中の水を司る役で酒なんかつくつて売つてはもつてのほかのことなのに。有明は有明の月であるが、ここでは有明にと季語にするところをたとえめかして主水に冠せられたものである。昔太閤秀吉が朝鮮陣に州牧商人になつて興じられた様を真似て当時大名屋敷で同じような遊び事

をしていた風潮を踏んでいるとか。

かしらの露をふるふあかむま

重五

酒屋の前で赤馬にのつて来たところを軽く付けた。赤馬は駄馬のこと。丁度七音になるから赤馬としたのだ。前句の有明に露を付けた赤馬がぶるつと頭を振つて今着いた体。

朝鮮のほそりすゝきのにほひなき

杜國

前句の露からすすきを連想し、朝鮮すすきの特徴を句作して前句の場へ寄せた付け。にほひなきは色艶のことで句ではない。赤馬から朝鮮を付け、ほそりすすきは穂の不长しますすぎとか、朝鮮なればにほひなきとなつたのだ。

日のちりくくに野に米を刈る

正平

日のちりくは日光の薄れた早朝とか夕暮れのどちらでもいう。米を刈るは稲を刈ること。稲刈を米刈と新語にして句を新しくする気持ち。稲を富草というのと反対の技だ。

わがいほは驚にやどかすあたりにて

野水

わが草庵は驚の峠のあるような人里離れたところであるよの意。前句を田家の情景とみてそれを眺めている人の境涯をつけた。越人は「隠者などの躰也。一句の躰は百舌の草ぐき有あたりの歌などにて仕立てる句也」と注する。これは万葉集に「春されば百舌の草ぐき見えねども我は見遣らむ君があたりを」がありこの歌を指している。稲を刈る働く人に対してわびを楽しむ

隠者の生活を詠った。

髪はやすまをしのぶ身のほど

芭蕉

剃った髪の伸びるまでの間、人目を避けて隠れている境遇である。驚に宿かすの言葉に情け深い人柄の余情を受け、匿かくまい人とし、それを事情あつて還俗した人の様としたのである。前句の人をただ出家して隠棲の人と見ず、わけしりの人と見て係り人を向かわせた付け。なんと想像力の働くことか。ここは季語はなく雑の句。

いつわりのつらしと乳をしぼりすて

重五

前句を鎌倉の縁切寺の様を思い浮かべて、子をなした間なのに、裏切るとはまことに無情なことよと相手の男を怨みつつ、張つてくる乳をしぼりするさまである。前句の忍ぶ身のほどを恋ゆえと見定めて悲恋の一曲をもうけた作。縁切寺は北条時宗の妻寛山尼が建立した東慶寺のことで、駆け込み寺ともいつて今でも恋愛の悩みを抱えている女性がたくさん参拝しています。

きえぬそとばにすごとくとなく

荷兮

文字の消えない新しい卒塔婆にまざまざと亡き人の面影を思い浮かべてなきくずれる様。前句の乳をしぼりするのを、乳児を亡くした母親と見てその墓参を思い寄せたのである。

影法カゲボウ あかつきさむく火を焼たい

芭蕉

暁の寒さに火を焚いてあたっている人影が見えるという意。前句

の消えぬ卒塔婆を新仏と見て、喪屋のさまを付けた。人とせず影法としたところに悲しく寂しい気があらわれている。

あるじはひんにたえし虚家カライエ

杜国

前句の影法の主を貧寒を忍ぶ人と見た付け。一家は零落離散し空き家のような家になお一人住む鰥寡かんかの孤独の人形影相弔の姿である。文選に落々巷士 抱影守空廬の詩の趣をとった作である。前句の影法の主を貧寒を忍ぶ人と見た付け。

田中なるこまんが柳落つるころ

荷兮

田中の「こまん柳」も散る頃であるとの意。前句を零落離散の人住まぬ家ととり、荒廃蕭条たる晩秋の景としてその時節を定め、小まん伝説を余情にみせようとした付け。小まん伝説は浮名を立てられ辞世を残して身を投じたその印の柳を小まん柳という巷説のこと。柳散るとせず、落つるころとして零落の響きを出し前句の季節を定めたものである。

霧にふね引く人はちんばか

野水

霧のたちこめる中を曳舟する人が前かがみに足場の悪い河岸をゆく姿勢を、ちんばであろうかと興じた句。前句を水辺と定めて曳舟を思いついたので。ちんばかは一句の興。現代では差別語として使わなくなった。

たそがれを横にながむる月ほそし

杜国

夕日が西の空にかかっているのを、寝て居て見るので横にながめ

ると面白くあらわしたものの。月ほそしは陰曆三、四月頃の纖月の形容したもの。前句に霧があるので、ほのかな月を付けるのは付合だからだ。

となりさかしき町に下り居る

重五

宮仕えの人が奉公を辞して市井に住みわびるさま。下り居るがそれを指している。隣が口さがなくうるさいことだ。前句を物思いのあまり空を眺めているさまと見て、上品な人の裏町・小路などのわび住まいを思ったのである。源氏物語の夕顔の宿の思いからの作。

二の尼に近衛の花のさかりきく

野水

二の尼は天子崩御のみぎり尼になった官女の中第二位のもの。隣さかしきをいう人を上流の人と定め、かつて禁中にありし人の昔を慕う様と句作した。二の尼なる人に訪ねられて御所の近況を花にかこつけてたずねているのである。近衛の花の近衛は禁中の北面の武士の詰める近衛府であるが、ここは汎く宮中の桜を意味する。私は北面の武士は西行こと佐藤義清を思うし、又源氏物語の髭黒が近衛大将であったことを思う。花がでるのは花の定座であるからで禁中の盛衰のさまを象徴する。

蝶はむぐらにとばかり鼻かむ

芭蕉

蝶も葎にとまるありさまでとばかり、あとは涙にかきくれたの意。花どころか葎にしがれるさびしさで、と変わり果てた御殿の式微

のさまを二の尼が語る姿である。むぐらは八重葎などの総称であつて雑草の丈高く生い茂っているのをいい、さびれていることを象徴する。鼻かむというのは泣いて鼻をかむことで、源氏物語などに多く出てくる表現。先年百合子さんに朗読して貰った須磨の巻きのころづくしの秋風の項に、源氏の恋ひわびての歌に「人々おどろきてめでたうおぼゆるに、忍ばれであいなう起きあつ、鼻をしのびやかにかみわたす。」とあるなどである。

俳評評論纂

*喜怒哀楽 2-3 Vol.6 昨年(二〇一八)二月一〇日発行の同誌は本誌の印刷を時々依頼する新潟市の出版社の情報誌である。木戸敦子さんが八人のスタッフを抱えて隔月に各結社の句会を取材して知らせてくれる。私には便利な情報誌である。故平野ひろし先生の紹介により先の五周年記念誌の刊行をお願いしたし、昨年の良寛記念俳句会を紹介してくれて初めて出席した。序でに新潟に足を伸ばし訪問した。今年から無料配布してくれることになった。冒頭の同誌には行方克巳主宰の知音俳句会京橋教室の様子を載せている。私の選句のみここに載せる。「月光の名残の霜を踏んでゐる」(庸子)「神棚へ破魔矢の鈴の音(ぼす)

(和音)。この主宰は慶応の中学校で国語の教鞭をと

っていた教師であつた由、選評と添削がうまい人で
す。「軍靴ならずよ霜柱さくさくと踏み」(克巳)が五
句のうちの一句。その他短歌川柳俳句二五〇句余も
全国版で掲載され、新潟の記憶館便りにこの月は堀
口大學の功績を紹介している。リレーエッセイも面
白く、敦子さんの後記も飾らずいい。最新の囃は一
茶・三頭火俳句大会が日暮里の通称月見寺で行われ
たのを取材した記事が丁寧に書かれてある。「一本の
音にはなれず冬の滝」(天和)が大会賞に選ばれてい
る。井上弘美、鈴木節子、檜山哲彦各主宰の選に入っ
ている。以前の私の句「凍滝の白き巨人の立上がる」
がある。鈴木節子さんに「一本の棒となりたる滝の前
の句もあるとか。作者の人生観、想いが宿った句とし
て井上弘美主宰の特選。新潟の記憶館は丹下左膳の
著者の長谷川海太郎のこと、林不忘がペンネーム。他
に二つのペンネームを持つ天才作家でしたが、三五
才で夭折。丹下左膳は映画化され面白い名作でした。
この号の編集後記も敦子さんの新年決意が述べられ
ていて声援を送りたくなるいい文章です。次回から
は受贈誌の項で句を紹介します。

受贈誌(平 31 年 1 月号)

貝殻の混じる壁土干し大根(東京クラブ)

万世遊

磯菊や津波避難の丘示す(〃)

〃

紺深む寒月光の相模灘(〃)

晴夫

初夢の雲散霧消を善しとせり(〃)

璃子

下仁田の葱の太さよ短さよ(〃)

理佳江

大いなる山脈雪を装へり(朝日俳壇 1.13)大串章選

展子

白鳥の湖となりたる棚田かな(〃)

六郎丸

生牡蠣を啜るフジタの絵の白の(〃)高山れおな選

一政

風の神戸に灯るルミナリエ(〃)稲畑汀子選

湧水

風花の地をさぐりつつ消えにけり(1.20)大串章選

蘭郷

お便り広場(到着順、敬称略)

冬至が過ぎて少し日暮れが遅くが遅くなったようにも
思います。年末までお天気に大きな崩れもなさそうです
が、カラクになつてもいやですしほどの雨も欲しいな
どと思います。お天気でお活躍のご様子何より嬉しくも
存じます。お出かけ多いのが幸し私にそれぐ行先でのお
珍しいものをお手に入れてそれらを下さいましてありが
とうございます。木のトキのしおり、丹頂のあかい頭や緑
のくちばしの折鶴(こんなのはじめてみました。工夫がすごいで

すね)それぞれがすばらしい絵ハガキ、自然教育園の二年、お姉様のお手作りの巾着等すべてお心尽くしの品々厚く御礼申し上げます。しかしながら大切にしていっても先が短く後に残すことになりそうで心残りの品々となるのをおそれております。渋谷栄一ミュージアムの絵ハガキ大の氣に入ります(王子のお稲荷さんでもこの種のハガキあり)。結社二つの実作やら白金葎の編集などお忙しいことと存じ上げますのにお氣遣い恐縮しております。話が飛ぶのは私のクセですがイタチの件では私の生家は南品川仙台北上でしたが祖母はイタチも蛇もよく出たと言っております。ニワトリ・三羽飼っていたそうです。蛇がニワトリに食べられるのを見て玉子を当分食べないと云ったそうです。普通の町中でもイタチは見かけたそうです。今日は近くのパルコのガリリヤでキャロリングがあり賛美歌八曲歌いますがしくなり帰ってきました。書いています中に十二時で少し、ヨレクになりましたのでこの辺おしやべり止めようと思います(二十四日)。平成も終わりに近く老いた私の言葉が通じなくなりました。買物をして「いかほど?」と云ったら、キョトンとして「いくら」と云ったら通じました。同様に「おぐし」は「おかみ」「お召しもの」は「お着物」「おしたじ」は「おしょうゆ」「お

かちん」は「お餅」。「おかちん」はあまり使わないかも知れません。母方の祖母は旗本の娘でしたからかいつも「おかちん」でした。そうく「おみおつけ」は味噌汁、子供でしたから意味も解らず「おみよつけ」と云っていました。言語の移り変わりは時代と共にでやかましく云うことに異議が多いようです。私は方言も大好きで無くしてはならぬものと思います。何で道筋が外れたのか変な手紙になりました。歯科の予約午前十一時四十分なので失礼いたします。高志先生はじめ皆々様の年末年始のご安泰を切に願っております。沢山の御礼を申し上げます。ごきげんよう。

二〇一八年十二月二十五日 光 みち様 (25 璃子)

(昭七さんに頂いた江戸語辞典を引いたら「おかちん」は出ていました。搦飯也とあり、餅の女房詞にて「おかちん」と丁寧に云う場合の言葉らしいです。高志)

今年は長いご無沙汰をお許し下さい。俳句の本を送付して下さり有り難うございました。ここに俳句誌代金を、私の乱雑な手作りのカブの千枚漬けと、大根のゆず漬けを合わせて送ります。実家の姉と甥の芳邦が、無農薬で作りました。披露するほどではないけど。

一人居の年の暮れまた静かなり

楨田輝子 (12/27)



恩師より迎春引菓子到来 (平成三十年大晦日) (高志)

白金葎ありがとうございます。着いたのが十二月の終りでしたので読みながらいろんな事がうかびました。嫁いってから何十年毎年十二月三十日は餅搗きでした。兄の作った餅米で兄の子孫ひい孫それに私達兄弟妹は自分の孫も連れて来ました。朝から一日中皆でわいくおおにぎわいです。子供もエプロンをし小さい手ですそれぞれの親に教わりながら丸めました。今から五年位までしていました。そんなことを思い出しながら年の瀬を迎え元気で新しい年を迎える事が出来ました。感謝でいっぱいです。兄の満足そうな顔を忘れることは出来ません。高志さんは遠く離れていたのですがその景色は見えませんか。でも餅は届いた事もあったと思います。これは送るんだと云って楽しそうな兄の姿が浮かびます。遠くに居たのでその分苦労もあったと思います。自分で努力して自分の道を進んだ貴男に私達もはげまされてきました。今も努力にくをしてがんばる姿に私達も鼻高々です。お身体に気をつけてがんばって下さい。

高志、敏子様

(1.5 幸子)

(もつと昔の餅搗きを俳句にしたことがあります。東京新聞に載った二句を書いておきます。聞こえ来る餅搗く音に馳せ帰る

餅筵餅に筵の跡が付く 高志

拝復 年が明けたのでどうぞ本年もいい年であられます様祈っております。今年八／一三(日)に戸高同窓会が挙行される由、首都圏在住の我々同級生福山へ参加しに行けたら・・・と夢見ております。(自己責任で元気な者で・・・)加齢で日々身に現れる不具合に驚く日々です。日本国空襲を指揮したカーチス・ルメイ將軍に勲章を授与した!!

(1.12 美智)

(大阪の山田先生が私に会いたがっておられますので、本誌の十周年記念号を待つて先年芝でのことを大阪で行おうと思っています。二〇二二年夏の予定です。取りあえずそれまでお元気で。高志)

寒中お見舞い申し上げます。昨年暮れに白金葎を送っていただき有難うございました。お元気で過ごして下さい。十二月号の「枯葦原何ぞ明るき分け入れば」を読み、かつて司馬遼太郎の本に坂東武士の起こりで武蔵野の葦原に朝鮮半島から渡来した人間のことを読んだ記憶がよみがえりました。同作家の本が好きで今は「歴史を紀行する」を読んでいます。寒い時節ご自愛ください。(1.14 昇)

寒中お見舞い申し上げます。陽さし日中暖かく明るく嬉しいですね。十二月の御誌頂き何か世迷い言を書くつもりがいろいろな事につまづきモタク新年になつてしま

ました。一通り伝統行事の真似事が済みましたら九日にインフルエンザ発症感染源不明で特効薬二錠すぐ解熱しましたが二次感染予防のため八日も引きこもり句会も欠席でした。今年もよろしくお願い申し上げます。二〇一九年の白金霞ますくご発展を念じております。年末年始事多くこれから先天皇ご退位とかニュース種は浜のいさごの如しですね。光成高志様 光 みち様（118長屋璃子）「松過ぎてまたも光陰矢のごとし」とか、虚子の句にあって通りで、と毎年思いますけれど、春までにやゝ長いのはこの一月で、一月終らないうちに少しでも仕事（版画の）を進めたいと思うこの頃です。暖冬ではなく寒風の強い季節、お身体御大切に。

（122陽二）

十周年記念兼題句撰集（2）

梨の花

白井市は白一面の梨の花

一枝にこぼるるほどに梨の花

春眠

春眠のまなうら虹のごときもの

春眠のぱつと見事に下車したる

麦飯

麦の飯諸飯嫌ひ昭和過ぐ

二杯目の麦飯女ざかりかな

初夏

手賀沼のスワン声なき夏はじめ

幸一

沼が賑やかなのはむしろ冬である。近年数は減ったけれど渡ってきた鴨の大隊がそれぞれの種類の声を挙げて騒いでいた。それが引き上げると、棲みついた瘤白鳥の小群が頸うなだれて遊弋するのみ。夏初めの沼にふと寂しさを感じる時である。「スワン」というなめらかな語によつてきれいなリズムが生まれ、情緒が深まっている。

蓮見船（H 28 715）

*白鳥にスワンボートとに梅雨風

孝三

水面に雨跳ね上がる梅雨豪雨

高志

手賀沼の水天髭髯虎が雨

〃

鳥肌のやうな水面や梅雨はげし

興正

*白鳥は生物、スワンボートは白鳥を模して作った小舟、二つは共に梅雨風の豪雨に打たれている。白鳥は首を曲げ羽根を水面に埋めて身じろがず、スワンボートは平気で沖を見つめている。見つめる作者の心は無論何も書かれていない。そこに余情がある。

行く秋

秋深し飛行機雲の薄れゆく

健二

此秋の行くや臥床の窓の雲

高志

栗

草分けて足で拾ふや栗の秋

昭七

*さじで食う栗の中身は月の色

啓泰

* 栗の色から月に飛躍した発想力が啓泰さんらしく力強い。匙で掬って食ったお蔭である。栗名月に響く。

沢庵漬け

沢庵漬母が塩振り僕が踏む

高志

神無月

* 裏川の鯉の色増す神無月

多美子

* 釣りが目的で結婚早々手賀沼のほとりに越してきた。片目を失って釣りは止めたが、今でも淡水魚は大好きだ。少年の頃、釣ってきた獲物は母の手で食卓に出た。恵比須講近い神無月ともなれば、家の裏を流れる野川の水もやや涸れて冷たく澄んできくる。深ん所に身を潜める鯉は、背の色まではつきり見えてくる。この季節、鯉は太つてきている。青黒い真鯉でなく稀にいる緋鯉だったら、冷え込みとともに更に色が冴えよう。釣り達者な老爺に鯉は一日一寸釣ると教わった。尺鯉なら十日通う気構えが要る。それほど鯉釣りは難しかった。追憶と望郷の念を誘われる季節感豊かな佳句である。

我孫子日記

	12/21	例会
	12/24	浄名院
*	12/28	JH
	1/1	初詣
*2	1/2	
*3	上野・谷中	
	1/7	初芝居
*4	1/9	SOA
	1/11	Lets me enjoy!
	1/12	源氏(澤標)
	1/15	北総病院
	1/16	SOA
	1/18	例会

* 芋坂の羽二重団子クリスマス

* 風や碑を撫で歌ふ「叱られて」

* 一時間遅れの初日届きたり

* 初鵜畑の土をつゝ走る

* 竹潜り竹跨ぎゆく恵方道(みち)

* 初詣鎌倉道を抜けて来し

* 初詣皇紀二六七九年也

* 軽みとはボルカドウィーンフィルの

* 正月の埴輪の目口洞昏し

* 大詰めに全灯点る初芝居

* 弓打つ時ツケの強打や初芝居(みち)

編集後記

璃子さんの一八日着のお便りの通り大寒は名のみ、空の青にも光ありて、ここ編集室は明るく温かです。先に今年からの予定を書きました通りに一つ一つ実行して行くつもりです。それだけでも毎日が楽しくうれしい気が湧いてくるのは年のせいでしょうか。お便りという消息^{せうそ}ををいただく、この世を共に歩んでいるという気持ちになるからでしょうか。

白金霞一月号(通巻第九四号)平成三十二年一月二十二日発行

編集・発行人 光成高志 発行所 一七〇・一二一九 我孫子市南新木二・四・七

表紙の題字・加納綾女 同写真は平成三十二年二月二十二日の白金霞